

海外実習報告書

今回、私は2011年1月11日から同年2月4日まで、オランダのGroningen 大学医学部の附属病院(UMCG)の麻酔科で実習を行いました。

このプログラムを希望した理由は、第一に日本以外の国での医学教育のあり方を知りたいと思ったことです。これは私の個人的な関心のためでもあります。それとは別にこれまでも日本の医学教育を批判する声を聞くことがたびたびあり、外国で実際に教育を受けてみれば、日本の教育の良し悪しが判るのではないかと期待しました。また、当然のことですが日本と欧米との間には大きな文化の違いがあり、将来、留学や学会などで外国の研究者と交流する機会があることと思いますが、私たち日本人と彼らとの考え方の違いを今のうちに体験するのは有意義であると考えました。

5回生から始まったクリニカルクラークシップでは、麻酔科をラウンドする機会は残念ながらありませんでした。私は、11月初旬の秋休みと年末の合計2週間ほど、阪大病院麻酔科で実習させていただきました。この阪大病院の実習は、UMCGでの実習に知識面・技術面で非常に役立つものでした。

UMCGの麻酔科での実習は4週間で、最初に教授からイントロダクションがあり、実習での達成目標についての説明があり、実習はレジデントの先生について行うことになりました。最初の2週間は手術場での麻酔を見学することが中心であり、マスク換気などの手技を実践する機会もありました。3週目からは挿管などといった、より高度な手技を行う機会があり、4週目では担当症例ほぼ全例で挿管を行いました。実習の評価についてのディスカッションは、指導教員と適宜行い、達成された項目や改善点などを話し合いました。

当地の麻酔科で行っていることは、基本的に阪大病院とそれほど違いはありませんでしたが、日本では使われていない薬剤(Sufentanil など)がいくつか存在し、また麻酔専属の看護師が業務に当たっていたことが印象に残りました。この実習で得られたことで最も重要なのは、マスク換気や気管挿管といった、患者のバイタルを保持する上で非常に重要な手技を体験することができたことと考えます。その他、術中管理等で疑問に思ったことをスタッフ達に教えていただきました。

また、当地での医学教育のあり方は日本よりも学生の自主性を重んじているように感じました。例えば気管挿管など高度な手技でも自分からやりたいというアピールをすれば認められる反面、何か指図されるのを待っている受身の姿勢でいればただ見学しているだけの実習に終始することになります。ヨーロッパの文化が個人の責任に重きをおいていることは知っていましたが、今回の実習ではそのことを肌身で感じる事ができました。

今後の抱負としては、将来何らかの形で海外活動する場合に、今回の経験を踏まえな

がら、より円滑に外国の研究者とコミュニケーションをとり、臨床や研究でできる限りの業績を残したいと考えています。